

## 『平家物語』「安徳入水」について

四重田 陽美\*

抄録 『平家物語』は、1185年3月に源氏との戦いに敗れ、下関沖で身を投げた平家一門を中心に、「諸行無常」「盛者必衰」をテーマとして描かれた軍記物語である。本稿では、この『平家物語』全12巻のうち、巻第十一を使って、第81代天皇にあたる安徳天皇の死を読み解く。

安徳天皇は、高倉天皇と平徳子との間に生まれた。高倉天皇は後白河天皇と平滋子との間の子であり、平徳子は平清盛と平時子の娘である。つまり、歴代の天皇の中では珍しい、4分の3が平家の血筋という天皇である。1181年に栄華を極めた祖父平清盛が亡くなったあと、清盛の子や弟たちは、源氏に攻められ、都を出ることを決心する。この際、清盛亡き後の平家を率いた平宗盛<sup>むねもり</sup>は、安徳天皇と三種の神器（天皇の証）を持ち出し、都の貴族を動かしている後白河法皇にも行動を共にしてもらえば、平家の落ち着いた場所が「都」であると考えますが、後白河法皇は平家と行動を共にすることを拒絶する。それでも安徳天皇がいれば、天皇を護る軍が官軍であるため、平家は官軍として毅然と京を離れるが、結局、源義経という戦いの奇才に敗れる。最後の時を迎えた平家は、「浪の下にも都がありますよ」と、数え年で8歳という幼い安徳天皇に説き、一門全員で入水した。

本稿では、その『平家物語』の巻第十一の数章（「逆櫓」「勝浦付大坂越」「嗣信最期」「那須与一」「弓ながし」「志度合戦」については簡単ならずじ、「鶏合、壇浦合戦」「先帝身投」については原文）を紹介し、原文には現代語訳を付しながら、平家の血を濃く引く安徳天皇が、祖母平時子（二位尼）に抱かれて、海へ飛び込む場面をまとめた。そして、何故、時子は幼い安徳天皇を連れて入水自殺する道を選んだのかについて、一考察を加えた。

## はじめに

『平家物語』という軍記物語があります。1185年の年号が、平家方には寿永と呼ばれ、源氏方には元暦と呼ばれるのは、この年の3月の末、関門海峡を戦場にして、源氏と平家が戦い、栄華を誇った平家が滅亡したからです。そして、この平家の栄華と滅亡を軸に、「諸行無常」「盛者必衰」をテーマに描かれたのが、『平家物語』です。

高等学校の教科書で、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす」からはじまる冒頭と、あと数話の武将の話を読む程度かもしれませんが、実は、『平家物語』は鎌倉時代に成立して以降、人々に愛され、多くの脚本家たちにアレンジしたいという気持ちを持たせる作品となりました。

明治時代に、義務教育で国民全てに日本の歴史を教えるために、歴史を区分する場合に、政治の中心がどこにあったかを基本として分けたものが、平安時代、鎌倉時

代といった時代の名前です。一方、文化を区分するとすれば、「古代」とは、一部の特権階級が自分たちだけに分かる暗号のような文字を使って文化を楽しむ時代、つまり、日本の場合は、奈良時代、平安時代あたりまで、「近世（現在に近い世）」「近代（現在に近い時代）」は、望めば誰もが文化を楽しめる時代、つまり、日本の場合は、「近世」は江戸時代、「近代」は明治時代から昭和の太平洋戦争の終わりあたりまでということになります。そして、その「古代」と「近世」「近代」の間、つまり、日本の場合は、鎌倉時代から南北朝・室町・戦国時代あたりを「中世」と呼ぶのです。

この「中世」に、文字を読めない人々も、「語り」の形で楽しんだのが、『平家物語』でした。法師姿に楽器の琵琶を持ち、その姿から「琵琶法師」と呼ばれる、『平家物語』専用の語り手によって、『平家物語』は全国に広まったのです。

私が『平家物語』と最初に出会ったのは、3歳ぐらいの頃、母が読んでくれる寝物語の数々に飽きて、他のお話はないの？とせがんだときに、母が記憶からひねり出した「あつもりさん」という美男子の話でした。母の話

\*文学部日本語日本文学科

の中での「あつもりさん」(後に、これが平敦盛だと知りました)は、十六歳の美男子で、くまがい(この武将は熊谷次郎直実です)に、「敵に背中を見せるのは卑怯だ」と呼び返されて戦うことになります。ところが、「くまがい」が、力で勝って「あつもり」さんを膝の下に組み敷いて、兜を脱がせてみると、中から見たこともないほど美しい男の子が現れたのです。「くまがい」は、「あつもりさん」を殺したくない、なんとか助けたいと考えます。母の話はここまでで、なんと、この先を、母は忘れてしまったと言ったのです。幼い私はがっかりして、そのあと「あつもりさん」の話をあれこれ創造するしかありませんでした。

大学生になって、『平家物語』巻第九「敦盛最期」を読んだときには、感動しました。私の「あつもりさん」がここにいたと思って、嬉しく読み進めたのですが、残念ながら章題でおわかりになるように、この話は、敦盛の最期を記したものです。ご存知の方も多いと思いますが、熊谷次郎直実は、なんとか敦盛を助けたいと考えますが、振り返れば源氏の兵がたくさん近づいてきていて、やむなく敦盛の首を斬るのです。そして、自ら法師となり、敦盛の菩提を弔いました。それは、3歳の私には想像も付かない話でしたが、かつて心を捉えた「あつもりさん」と再び大学で再会したことが、私にとってはとても不思議で、心躍る体験でした。幼い頃に出会ったものを、大人になって追体験する喜びは、学びのひとつの効果なのでしょうね。

さて、今回は、その『平家物語』の一節から、平家の人々が最後の戦いに負けて、壇の浦に入水していく所を紹介したいと思います。

### 安徳天皇入水について

1181年、権勢を誇った平清盛<sup>きよむね</sup>が亡くなると、平家の勢いは急激に衰えます。関東から大軍で都に進軍する源頼朝軍を抑えられず、一方で、長野県木曾から進攻した源義仲軍に負けた平家軍は、義仲軍が都に入ってくるという知らせを受けて、1183年7月、一門そろって都を離れることを決意します。

都落ちについては、都に残って最後の一人まで戦うことを主張した人もいたのですが、現棟梁の平宗盛(むねもり)が、妹徳子(高倉天皇の中宮で、天皇亡き後は、建礼門院と呼ばれていました)に相談し、女たちは戦いに参加しないけれど、都で戦うことになると、目の前でひどい事態を見ることになるかもしれないから、都を離れたいと相談したのです。

宗盛の案は、こうです。「どこへ行こうが、天皇さま

の居る場所が『都』である。ただ、後白河法皇という、貴族のトップに立つ人を京に残すと、なにかと面倒なので、京を離れる際に、安徳天皇と天皇の証、そして、後白河法皇をともなっけて行けば、落ち着いた場所を『都』として、安徳天皇を補佐して、この国を治めていこう。そして、「むしろ、京で戦えば、女性は助かるかもしれないが、男性は負ければ源氏に殺されることになる。それは安徳天皇も例外ではないかもしれない。安徳天皇を退位させ、別の天皇を即位させれば、もう安徳天皇は天皇ではなくなり、平家の血を引く謀反人の一人として、死刑になるかもしれない。目の前で、安徳天皇の死刑を徳子は見ることになるかもしれない。そのひどい事態を見ることに徳子は耐えられるのか」。

宗盛の話聞いて、徳子に選択の余地はなかったのでしょうかね。平家一門みな揃って、京を離れることに賛同します。ところが、後白河法皇は危機管理が優れていたのでしょうか、宗盛が来る前にひそやかに自宅を抜け出し、京の北山・鞍馬に身を隠してしまいます。宗盛の案はこの後白河法皇の出奔のせいで、崩れてしまうのですが、宗盛は1183年、強引に都落ちを決定します。

それでも、平家は勝つつもりでした。でも、戦いの奇才、源義経の繰り出す奇策に翻弄され、1184年3月、勝てるはずの一の谷の合戦で敗けます。この時、「あつもりさん」も逃げるところを熊谷次郎直実に見つかってあえない最期をとげますし、多くの平家の人々が命を落とします。そしてとうとう、1185年3月。実は、宗盛はまだあきらめていませんでした。平家の船はすぐれもので、海を渡って大陸へ行けるほどのものでしたので、2年前にまんまと逃げて今や京の都で高みの見物を決め込んでいる後白河法皇に、「あまり追い詰めたら私たちは大陸へ国の宝(三種の神器)とともに、逃げますよ」と警告を発し、本気で天皇もろとも都を大陸へ移す気持ちでいました。しかし、清盛の妻で、清盛亡き後、平家を陰で支えてきた時子が一番に考えたのは、可愛い孫の安徳天皇のことでした。『平家物語』1185年の記述を簡単に紹介します。

元暦2(1185)年

◎正月10日 源義経が、後白河院を訪れ、平氏追討の意志を表明する。

◎2月16日 源義経は、四国(阿波)に到着する。以下、四国での合戦。

逆櫓 源義経が平家追討に出陣。四国へ到着。

勝浦付大坂越 義経は屋島の平家が千騎にすぎないと聞き、急襲。

嗣信最期 源氏は屋島の内裏に火を放つ。平家は船で海へ逃れる。  
那須与一 那須与一は平家の小舟に立てられた扇を射落として名声を得る。  
弓ながし 平家は船の上、源氏は馬を海中に乗り入れて戦う。義経は過失で流してしまった弓を命がけて拾い、名誉を守る。  
志度合戦 阿波民部重能の嫡子教能は、義経に生け捕りになった。

四国の合戦に勝って、源義経は益々その強さを示し、元暦2年（1185年）3月24日、平家は満を持して、壇の浦の合戦に向かいました。

◎3月24日卯の刻、豊前国門司赤間の関（下関赤間町瀬戸内海の西端）にて、源平矢合せ

卷十一 七 鷄合（とりあはせ）壇浦合戦

元暦二年三月廿四日の卯刻に、豊前国の門司、赤間関にて、源平矢合とぞ定めける。

（訳）元暦2（1185）年3月24日の午前6時頃に、豊前国（福岡県）門司と赤間の関で、源平の矢合せと定めた。

さる程に源平の陣のあはひ、海のおもて卅余町をぞ隔てたる。門司、赤間、壇の浦はたぎりておつる潮なれば、源氏の舟は潮にむかうて心ならずおしおとさる。平家の舟は潮におうてぞ出で来た。……（中略）……すでに源平両方陣をあはせて関をつくる。上は梵天までもきこえ、下は海龍神もおどろくらんとぞおほえける。

（訳）さて、源平の陣の間は、海面三十余町（一町＝約109m。条里制では、六尺＝一步、60歩＝一町）を隔てている。門司・赤間・壇の浦のあたりは潮が集まって、たぎり落ちるほど激しく流れるので、源氏の舟は潮に向かって、心ならずも押し戻される。反して、平家の船は、潮流に乗って前へ出て来た。……（中略）……いよいよ源平両方が陣を向かい合わせて、関の声をあげる。その声は、上は梵天までも聞こえ、下は海中の龍神も驚くだろうと思われた。

「関の声」というのは、現在では「エイエイオー」と声をそろえて言うことですが、この時代は、単純にお腹の底から「ウォー」と声を出すことで、これが戦いの始まりを告げる合図となります。

新中納言知盛卿、舟の屋形に立ち出で、大音声を立て、宣ひけるは、「軍は今日ぞ限り、者ども少しも退く心あるべからず。天竺・震旦にも、日本吾朝にも、なら

びなき名将勇士といへども、運命の尽きぬれば力及ばず。されども名こそ惜しけれ。東国の者どもに弱気見ゆな。いつの為に命をば惜しむべき。ただ是のみぞ思ふ事」と宣へば、飛驒三郎左衛門景経御前に候ひけるが、「是承れ、侍ども」とぞ下知しける。

（訳）知盛卿は、船の屋形に立ち出でて、大声をあげておっしゃったことは、「戦いは今日が最後、者ども、少しも引き退く気持があつてはならない。インド・中国にも、わが国日本にも、並ぶ者のない名将・勇士だといつても、運が尽きてしまうとどうしようもない。けれども、名声が惜しい。東国の者どもに弱気を見られるな。いつのために命を惜しむつもりか。これだけが今心に思う事だ」とおっしゃると、飛驒景経が御前にお控え申し上げていたか、「この御ことばを承れ、侍ども」と命令を下した。

戦いの指揮官は清盛の四男知盛です。この人はかつて、都で戦おうと主張したのですが、都落ちが決まってからは、源氏と戦うために様々な戦略を立ててきました。そして、知盛は「いくさは今日が最後だ」と宣言しています。彼は、今日の戦いで負けてももう逃げるつもりはありませんでした。

上総悪七兵衛景清かずさのあくしちびやうえかげきよすみ出でて申しけるは、「坂東武者は馬のうへでこそ口はきき候ふとも、舟軍にはいつ訓練し候ふべき。魚の木にのぼつたでこそ候はんずれ。一々にとつて海に浸け候はん」とぞ申したる。越中次郎兵衛盛嗣もりつぐ申しけるは、「同じくは大將軍の源九郎に組んたまへ。九郎は色白うせいちいさきが、むかばの殊にさし出でて著かんるぞ。ただし直垂と鎧を常に着かんれば、きつと見分けがたかんなり」とぞ申しける。上総悪七兵衛申しけるは「心こそ猛くとも其小冠者何程の事かあるべき。片脇に挟んで、海へ入れなんものを」とぞ申したる。

（訳）悪七兵衛景清（藤原景清）が、進み出て申し上げたのは、「関東の武士は馬上でこそ偉そうな口はききますが、船の戦いについては訓練する時がありません。まるで、魚が木に登っているようなものでしょう。一人一人捕まえて、海に浸けてやりましょう」と申し上げた。平盛嗣が申し上げたのは、「どうせ組むなら大將軍の源義経にお組みなさってください。義経は、色が白く、背が低くて、前歯が特に出てはつきり分かるそうだ。ただし、直垂と鎧をいつでも着ているそうだから、さっとは見分けにくいようだ」と申し上げた。景清が申し上げたことは、「心は勇猛であっても、その小冠者め、どれほ

どの事がある。片脇にはさんで海へ入れてしまおうと思うのに」と申し上げた。

「著かんなれ」は、形容詞「著し(しるし)」に伝聞の助動詞「なり」が付いた形です。はっきりわかるそう、という意味ですね。テレビやカメラのない時代、敵の大將の顔どころか、疎遠であれば敵味方の顔も判別がつかえません。だからこそ、平家は味方の証として赤旗を、源氏は白旗を身につけました。現在、紅白に分かれて戦うのは、この源平の戦いがはじめです。そして、敵の大將の特徴は、戦いの大切なデータとなりました。それにしても、義経は色白で、背が低くて、歯が出ているなんて、本人が聞いたらがっかりしそうです。

せっかく地の利を利用して、潮の流れの激しい関門海峡で、潮が東向きに流れる午前中に、決着する戦略ではじめた戦いでしたが、味方の裏切りが相次ぎ、源義経は身軽でなかなか捕らえきれず、平家の主だった武將は命を落としていきます。

## 卷第十一 九 せんていみなげ 先帝身投

源氏の兵者ども、すでに平家の舟に乗りうつりければ、水手梶取ども、射殺され、切り殺されて、舟をなほすに及ばず、舟底にたふれふしにけり。新中納言知盛卿、小舟に乗つて御所の御舟に参り、「世の中は今はいかうと見えて候ふ。見苦しからん物ども、皆海へ入れさせたまへ」とて、艫舳に走りまはり、掃いたりのごうたり、塵拾ひ、手づから掃除せられけり。女房達、「中納言殿、いくさはいかにやいかに」と口々に問ひたまへば、「めづらしきあづま男をこそ御覧ぜられ候はずらめ」とて、からからと笑ひたまへば、「なんでうのただいまの戯れぞや」とて、声々にをめきさけび給ひけり。

(訳) 源氏の軍兵どもは、とうとう平家の船に乗り移ったので、船人・船頭どもは、射殺されたり斬り殺されたりして、船を正しい方向に向け直すことができず、船底に倒れ伏していた。知盛卿は、小船に乗って天皇の御座所の御船に参り、「世の中はもはやこれまでと見えました。見苦しいような物などを、みんな海へ投げ入れなさってください」といって、船の前後に走り回り、掃いたり、拭いたり、塵を拾って、自分の手で掃除なさった。女房たちが、「知盛殿、戦いはどうですか、どうですか」と口々にお尋ねになると、知盛が、「珍しい東国の男をお目にかけましょう」といって、からからと笑われるので、「こんなさしせまった時に、なんというご冗談でしょう」といって、女房たちは、口々に大声でわめき叫ばれた。

冗談を言って、女房たちを怖がらせないようにしながら、知盛は、源氏の兵が攻めてきたときに見苦しいものを掃除し、海に捨てています。平家は都を離れ、九州や四国に寄港する地を失ってからは、長く船の暮らしをしていたので、知盛は、生活の汚れを敵に見られたくなかったのです。

二位殿はこの有様を御覧じて、日ごろおほしめしうけたる事なれば、鈍色(濃いねずみ色)の二衣うちかづき、練り袴のそばたかくはさみ、神璽をわきにはさみ、宝剣を腰にさし、主上をいだき奉つて、「わが身は女なりとも、敵の手にはかかるまじ。君の御供に参るなり。御心ざし思ひ参らせ給はん人々は、急ぎつづきたまへ」とて、ふなばたへあゆみ出でられけり。主上今年は八歳にならせ給へども、御としの程よりはるかにねびさせ給ひて、御容貌うつくしく、あたりもてりかかやくばかりなり。御ぐし黒うゆらゆらとして、御せなか過ぎさせ給へり。

(訳) 平時子殿はこのありさまを御覧になって、日頃から覚悟していられた事なので、濃いねずみ色の二枚重ねを頭からかぶり、練絹の袴の脇を高くはさんで、神璽を脇にかかえ、宝剣を腰にさし、天皇をお抱き申し上げて、「わが身は女であっても、敵の手にはかからないつもりだ。天皇のお供に参るのである。君に対しお志を同じく思い申し上げていらっしゃるような人々は、急いで私のあとに続きなさってください」といって、船ばたへ歩み出られた。安徳天皇は今年八歳におなりになったが、お年の頃よりはるかに大人びていらっしゃる。御顔だが端麗で、あたりも照り輝くほどである。御髪は黒くゆらゆらとして、お背中を過ぎるほどまで伸ばしていらっしゃる。

安徳天皇の祖母であり、平清盛の妻でもあった時子(二位殿)は、自らは身分の低い者から見られないように頭から衣を被り、天皇の証のうち、神璽(八尺瓊やまかみの勾玉)と宝剣(草薙くさなぎのつるぎ剣)を身につけ、孫の安徳天皇を抱いて船端へ出ます。

あきれたる御様にて、「尼せ、われをばいづちへ具しゆかむとするぞ」と仰せければ、いとけなき君にむかひ奉り、涙をおさへて申されけるは、「君はいまだしるしめされ候はずや。先世の十善戒行の御力によつて、今万乗の主と生まれさせ給へども、悪縁にひかれて、御運すでに尽きさせ給ひぬ。まづ東にむかはせ給ひて、伊勢大神宮に御暇申させたまひ、其の後西方浄土の来迎にあ

づからむとおぼしめし、西にむかはせ給ひて御念仏さぶらふべし。この国は粟散辺地<sup>そくさんへんち</sup>とて心憂き境にてさぶらへば、極楽浄土とてめでたき処へ具し参らせさぶらふぞ」と泣く泣く申させ給ひければ、山鳩色の御衣にびんづら結はせ給ひて、御涙におほれ、小さくうつくしき御手をあはせ、まづ東をふしをがみ、伊勢大神宮に御暇申させ給ひ、其の後西に向かはせ給ひて、御念仏ありしかば、二位殿やがていただき奉り、「浪の下にも都のさぶらふぞ」となぐさめ奉つて、千尋の底へぞ入り給ふ。

安徳天皇は、驚きあきたご様子で、「尼げ、私をどちらへ連れて行こうとするのだ」と言われたので、時子尼は幼い君にお向かい申し上げて、涙をこらえて申しあげなされたことは、「君はまだご存じでいらっしゃいませんか。前世で行なった十善・戒行のお力によって、今、みかどとしてお生まれになりましたが、悪い縁にひかれてご運はもう尽きておしまいになりました。まず東にお向かいになって、伊勢大神宮にお暇を申され、その後西方浄土の御阿弥陀仏に來迎いただこうとお思いになり、西にお向かいになってご念仏をお唱えなさいませ。この国は粟散辺地<sup>そくさんへんち</sup>といって辺境の小さな、つらい場所でございますから、極楽浄土というすばらしい所へお連れ申し上げますよ」と泣きながら申しあげなされるので、幼帝は山鳩色の御衣に角髪をお結いになって、御涙をはげしく流されながら、小さくかわいらしい御手を合わせ、まず東を伏し拝み、伊勢大神宮にお暇を申され、その後西にお向かいになって、ご念仏を唱えられたので、時子尼はすぐさまお抱き申し上げ、「波の下にも都がございますよ」とお慰め申し上げて、千尋もある深い深い海底へお入りになる。

戦場の慌ただしさが、この場の情報の乱れとなって現れているのに気づかれましたか。さきほどの安徳天皇は「御ぐし黒うゆらゆらとして、御せなか過ぎさせ給へり」とありますが、入水直前の安徳天皇は、「山鳩色の御衣にびんづら結はせ給ひて」とあり、黒くゆらゆらとした髪ではなく「びんづら」という童童の髪型をしています。これは、左右に分けた髪を両耳の脇で輪っかにしたものです。敗戦のどさくさで、誰かが天皇の髪を結ったとも思えませんから、この場にいた人間の話を取材するうちに、記憶が錯綜したのでしょうか。

悲しきかな、無常の春の風、たちまちに花の御すがたをちらし、なさけなきかな、分段のあらし浪、玉体を沈め奉る。殿をば長生と名づけて、ながきすみかたさだめ、門をば不老と号して老せぬとぞしと書きたれども、

いまだ十歳のうちにして、底の水屑とならせ給ふ。十善帝位の御果報申すもなかなかおろかなり。雲上の龍くだつて海底の魚となり給ふ。大梵高台<sup>だいぼんかうたい</sup>の閣の上、釈提喜<sup>しやくたいき</sup>見<sup>けん</sup>の宮の内、いにしへは槐門<sup>くわいもん</sup>、棘路<sup>きよくろ</sup>の間に九族をなびかし、今は舟のうち、浪の下に御命を一時にほろぼし給ふこそかなしけれ。

(訳) 悲しいことだ、無常の春の風が、たちまち花のような帝のお姿を吹き散らし、情けないことだ、六道をめぐる人間の生死の荒波が、天子の御身体を海中へ沈め申し上げる。御殿を長生と名づけて長いすみかと定めて住み、門を不老と称して老いることのない局と書いているけれども、まだ十歳にもならないうちに、海底の水屑となってしまわれた。十善の帝位にある方の、ご運のつたなさは、なんと申しあげても言い尽くせない。雲の上の龍は下って海底の魚とおなりになる。梵天王の高い宮殿の上、帝釈天の喜見城の宮殿の中のような、内裏の宮殿に住まれて、昔は大臣・公卿に取り巻かれて平家一門の人々をなびき従えておられたが、今は船の内に過ごし、身投げして波の下にその御命をあつという間に滅ぼされたのは悲しい。

こうして、安徳天皇は祖母時子に抱かれて海に沈み、二度と浮かび上がりませんでした。数え年8歳の、今で言えば小学校一年生くらいの幼い天皇は、哀しくも平家と共に命を落としたのです。この場面を聴く者はきっと涙することでしょう。ただ、現代の私たちには、どうしても腑に落ちない点があります。数え年8歳の少年が何故死ななければならなかったのか。そして、安徳天皇の母は何をしていたのか。もし私が安徳天皇の母ならば、お腹を痛めて産んだ我が子の命を、実の母の手に預けないのではないのでしょうか。あれこれ考えて、どうしても安徳天皇が生きていく道がないと思われたとしても、一緒に死ぬのは自分であると思うのではないのでしょうか。

もちろん、『平家物語』は小説ではなく、実在の人物たちが登場する作品です。とはいえ、800年以上も経ち、もう、当時の人々の考えを知ることはできません。同時代に生きた人々が書き残した日記などに、ヒントが残されていなければ、ここから先の考察は、推測にしかすぎないのです。しかし、物語の語り手が、平家が滅亡したあと何年か経って、『平家物語』を世に出そうとしたのは事実ですし、取材した枝や葉のようなものを集めて、どのような花を咲かせるかを考えたのは確かです。そして、その語り手の意図は、登場人物たちの描かれ方、言葉、行動に潜んでいます。そこから、仮説を立てることはできます。

## 二位殿は何故天皇を連れて入水したのか

結論から言えば、時子は、安徳を、天皇のまま死なせたかったのではないのでしょうか。遡ること5年、1180年に、高倉天皇の兄に当たる高倉宮<sup>もちひとおう</sup>以仁王という人物が、平家を滅ぼして欲しいと全国に雌伏する源氏に声を掛けた事件がありました。時期尚早だったためか、源頼朝は即応せず、事情はすぐに平清盛に知らされ、以仁王は逃げる途中で命を落とします。そのとき、天皇家の以仁王を死刑にすることはできないため、以仁王を捕らえたら、源以光（みなもとのもちみつ）と改名させて土佐国に配流することが決まっていた。

今回の戦いに平家が敗れたら、安徳天皇には似たような処遇が待っていたと思われます。安徳天皇は捕らえられ、退位させられ、その後、平安徳<sup>やすのり</sup>とかなんとかいう名に変えられて、どこかに流され、誰も側に居ないところで遠からず死を迎える。それは、平家が負けたあとの安徳天皇にとって、まだましな処遇です。下手をすれば謀反人扱いされて首を斬られるかもしれない。

祖母時子にとって、それは耐えられるものではなかったことでしょう。それよりもむしろ、最愛の孫を、天皇のまま、死なせてやりたい。「浪の下にも都のさぶらふぞ（海の底にも都がありますよ）」という時子の言葉は、天皇の居るところが「都」であるという、宗盛の考えと合わせると、安徳天皇を、天皇のまま死なせる意味でもあったのではないのでしょうか。そしてその、天皇の居るところが「都」という考えは、おそらく、1180年に強引に、福原（現在の神戸市）に遷都した、時子の夫清盛の考えでもあったのでしょう。

歴代の天皇の中で、戦乱で落命した唯一の天皇が安徳天皇です。そして、天皇の証とされた三種の神器のうち、鏡（八咫鏡）は戦場で源氏の手に移りましたし、神璽（八尺瓊勾玉）は岸辺に流れ着いていましたが、宝剣（草薙剣）だけは安徳天皇と共に、壇の浦深くに今も眠っています。安徳天皇を天皇のまま死なせるということ

が時子の入水の目的とすれば、剣が出てこないことに時子の強い意志すら感じます。そして、それが平家一門の決意なら、安徳天皇の母建礼門院も共に海に入るの、我が子を誰が抱くかについては、陰のリーダーの時子にゆだねることに否やはなかったのでしょうか。

## おわりに

以上、今回は、『平家物語』の「安徳天皇入水」を読んでもいただきました。高等学校の古文読解では、覚えなくてはならない古語単語や文法のために、古文に苦手意識を持つ人も結構いますが、ある程度の単語や文法が分かる方が、内容をさっさと読めるので、必要な語句や文法を学んだ後は、古文読解に手を出して欲しいと思います。特に歴史物語は、変えようのない歴史的事実と、知られることのない当時の事情と、作者や語り手がそれを書きたいと考えた思いが入り交じって、非常に興味深いです。

このあと、後白河法皇によって、天皇に即位させられた後鳥羽天皇は、三種の神器が一つないまま、どのような天皇として生きたのか、あるいは、『平家物語』はどのような記事で終わるのか、興味を持ったら調べてみてください。不思議に思ったこと、導き出せた結論など、語り合えたらうれしいです。

大学はプロフェッショナルになる資格を得るか、あるいは、プロフェッショナルになる方法を身につける所だと私は思っています。室町時代以降、教養を身につけたい日本の大人たちが、こぞってその内容を知らうとした『平家物語』を、教育者という立場と視点で読んでみるのも面白いかも知れませんね。

だから古典は面白いのです。

なお、掲載した原文は、『平家物語2』（日本古典文学全集30）小学館 一九七五年刊行から引用しましたが、現代語訳は拙訳です。

（2022年3月2日 受理）